

呉錦堂を語る会通信

NO.9 Aug. 2013

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2013.8.1



呉錦堂の故郷慈溪 その1 (訪問記)

この通信の1号から8号までは、呉錦堂の別荘であった移情閣や氏が開拓した神出小束野をテーマに発行してきましたが、9号と10号は目を中国に転じ、呉錦堂の故郷（浙江省慈溪市）をとりあげました。まず、9号は「呉錦堂の故郷慈溪 その1 (訪問記)」です。僭越ですが、編集委員橋の旅行記中心の内容になっております。続いて、10号は「呉錦堂の故郷慈溪 その2 (呉錦堂墓表)」と題し、呉錦堂墓の新旧二つの墓表と陳徳仁孫中山記念館副館長（当時）建立の「呉公作鑄澤郷碑」の碑文、それぞれの原文と日本語訳を掲載いたします。（編集委員 橋雄三）

《開通なったばかりの杭州湾跨海大橋を渡る》

2008年5月25日から26日にかけて、呉錦堂の故郷、浙江省の慈溪を訪問した。25日の10時過ぎ、バスで上海を出発。途中、5月1日に開通したばかりの杭州湾跨海大橋を渡り、約2時間で慈溪着。この大



橋の開通式には呉伯瑄氏が招待され出席されている。上の写真、左端が呉氏、真ん中左が慈溪市長。

《呉錦堂墓》

慈溪に着いて、まず最初に呉錦堂墓を訪れた。1926年、呉錦堂は急性肺炎により神戸で没した。31年、遺言に基づき、子の啓藩、甥の啓夏、啓鼎らが棺を慈溪の白洋湖畔へ運んだ。墓の東には低い山があり、岩山と木々の中、寺が見える。下の写真、寺の黄土色の壁と緑の木立は湖畔まで続いている。



この寺は金仙寺といい、ここで、呉錦堂追悼の儀式が

行われた。

墓は呉錦堂が生前、自ら建てておいたものである。夫婦合葬墓で、コンクリートで築かれ上部は円錐形をしている。墓碑の「呉錦堂先生墓」は張

謇の書

(1911宣統3年)で、その両側には、同じく張謇の筆にな



る呉錦堂自作の対聯「為愛湖山堪埋骨、不論風水祇憑心」がしるされている。墓の上部の墓表は、もともと、章炳麟が篆書で、呉の生前の事蹟をしたためたものであった。呉錦堂墓にとって、過去、受難の時代があった。人民公社の時代には、墓の裏の呉公墓荘は生産大隊の倉庫になり、墓園のセメント地は洗濯物干し場になった。文革の時代には、墓表も毀された。現在の墓表は、1984年、慈溪県人民政府によって新しく作られたものである。

《呉公墓荘に掛かる三面の扁額》

呉錦堂墓の裏手に呉公墓荘がある。ここで、墓守りが生活しており、呉錦堂資料館のようになっている。そこに、呉伯瑄氏が、日本から送った3点の扁額が掛かっている。この話をしよう。

私（橋）は、慈溪訪問から二ヶ月ほどした08年7月、移情閣（孫文記念館）で呉伯瑄氏にお会いする機会があった。このとき、呉氏は「呉公墓荘に、私が送った3点の扁額が掛かっています」とおっしゃった。

呉錦堂は、移情閣（1915年上棟）の落成に合わせて、建物に書や詩文を飾ることを考え、親交のあった書の名家や著名人に多くの作品を依頼した。現在、移情閣の1、2、3階、各階に7点ずつ掛けられているが、以前には、もっと多くの額があったと思われる。1984年の孫中山記念館開館時、更に遡って、呉錦堂存命時、他に、どんな人の書があったのだろうか。ここにあげる呉伯瑄氏の話は、少しだけこの疑問に答えてくれる。

「陳徳仁さん（当時、孫中山記念館副館長）から話があって、私は、白洋湖畔に眠る祖父も喜ぶだろうと思い、移情閣から、「恵敷桑梓」、「世外桃源」、「熱心公益」の3点を持ち帰り、慈溪へ送りました。1985年のことです（下の写真。但し、「熱心公益」のみ橘が現地で撮影）。」



因みに、「恵敷桑梓」は浙江巡按使屈映光の書。「世外桃源」は、己未秋日とあるから、1919年の秋とわかる。江溪馮璞題となっている。もう一面、「熱心公益」は大総統題褒となっているから、時の大総統黎元洪の書と思われる。

《杜白両湖の修復と呉錦堂学校の開設》

（財）孫中山記念会発行『呉錦堂 神戸と中国』（2006年発行）によると、1905年、呉錦堂は故郷の慈溪東山頭に戻り、先祖の墓に詣でた。杜湖と白洋湖は長年修理もされず、管理する人もいなかったため、呉錦堂は治水水利に着手した。10年までに洋銀7万余元を投じて両湖を修復した。また東山頭で教育の振興に乗り出し、洋銀22余万元で錦堂学校を建てた。

右、及び下の古い写真は孫文記念館所蔵『續刻杜白両湖全書』からの転載。

学校はその後、幾度か名称を変え、92年より、慈溪市錦堂高級職業中学となっている。



宣統元（一九〇九）年、治水工事の監督のため、杜湖東門閘の傍らに立つ呉錦堂



松浦第二閘門之圖



錦堂學校前桑園之圖

松浦第二閘門

錦堂學校と桑園

現在の錦堂學校
錦堂高級職業中學



2008. 05. 25



1



2

「錦堂高級職業中学」を写真で紹介いたします。

- 1：正面玄関
- 2：「錦堂師範旧址」の碑
- 3と5：校舎
- 4：中庭



3



4



5

《呉錦堂の生家と故居》

最後の訪問先は生家と故居である。運転手は、分かっていると言わんばかりに、村中の細い道へタクシーを進めて行った。もう、これ以上は進入が無理というところで、タクシーを降り、歩いて



狭い路地へ入る。少し行ったところが呉錦堂の故居。(左の写真)

壁には「呉錦堂故居」のプレート。故居は南向きで狭い路地に面している。昔からこうだったのか。門の上部に「日昇月恒」の文字。事業繁盛を祈る意味である。この裏（外からは見えない）側には「蘭芳桂馥」の四文字。家の持ち主の恵みが後世に及んでいくようにという願望を象徴している。

家には鍵がかかっている。裏手に廻る。裏の方が道も広く開けた感じ。2、3人、村のお年寄りの姿も見える。私の中国人の友人が古老に、中に入りたいと頼む。古老の一人がどこかへ消え、暫くして長い鍵を持って戻ってきた。鍵を開け、中を案内してくれる。2階建ての1階の一室は、呉錦堂記念室になっており、正面の壁に、呉錦堂の、胸に三つの勲章を付けた大きな肖像画が掛けられている。この肖像画は、『續刻杜白兩湖全書』

の最初に出てくるものである。1階には台所があるが、その他、どの部屋も全くの空で、何も無い。

外に出て、更に、狭い村中の道を行くと呉錦堂の生家。(右の写真)ここも写真で見たことがある。今は、呉錦堂と関係のない人が住んでいて中を覗くだけ。



これで、目的の場所は全て見たことになる。あと、錦堂路の表示を写真にとって、全て終了。



← 「錦堂路」の表示

村の古老と話す友人W



大人物小故事 (1)

我的外公呉錦堂 曹愛徳著

先日、孫文記念館の資料室で『大人物小故事 我的外公呉錦堂』という興味深い本を見つけました。作者は曹愛徳氏です。呉錦堂の墓表には最初の妻、徐氏のほか、後妻として丁氏と魏氏の名前がありますが、曹愛徳氏は、呉錦堂と魏氏との間に生まれた女性、瑤仙氏の令嬢です。この本は、18の短い話からなっております。ご本人の承諾を得ることができましたので、少しずつ掲載したいと思います。原文入力と日本語訳は編集委員の橘雄三が担当いたしました。ご叱正願います。(この頁は2014年4月17日に追加いたしました。)

前言

我母亲十三岁时，外公就离世了。所以我从未见过外公，从我懂事开始，母亲常对我说：“在这世上，最疼爱我的人是父亲，也是你的外公。在心目中最敬爱的人是父亲，也是你的外公。”平时只要提起外公，母亲就兴奋不已，而且滔滔不绝。竖起弯弯的大拇指，连连夸奖外公太了不起了，太伟大了。日久天长，外公的形象在我的心里，越来越高，外公的故事在我的脑海中也越来越清晰。

外公出生贫苦，生活艰难，无奈离家去上海当学徒，那时期倍受生活的煎熬。幸得机遇，经友人的帮助，中年东渡日本去经商，不断的拼搏，创业数十年，终于获得巨大的成功，成了日本“阪神财阀”，可贵的是外公富了不忘本，始终没有忘记自己是个中国人，外公不仅对孙中山先生领导的民主革命尽心尽力，而且热心公益，甚至积极参于对家乡教育，建设事业倍加关心！多次捐资，慷慨解囊，乃至全力以赴！对劳苦百姓深表同情，无私的帮助，对子女严格要求，从不溺爱，外公常对我外婆说：“与其给子孙留金山银山，还不如积德给子孙，教子孙如何做人。”

在那个年代，外公就具有对下一代要坚持艰苦奋斗，独立自主的育人理念，这是何等的难能可贵！母亲说：“外公留给我们的的是心灵的精神财富，那是取之不尽，用之不竭的珍宝。”因此我愿意把这些珍宝与读者，后代传承与分享。

外孙女 曹爱徳



序文

私の母が十三歳の時、(母方の)祖父は世を去りました。それで、私は、祖父に一度も会ったことはありません。物心がつくようになると、私の母は、いつも私に、“この世の中で一番、私を可愛がってくれたのはお父さん、あなたのお祖父さんです。心から一番敬愛するのはお父さん、あなたのお祖父さんです。”と言っていました。ふだん、祖父のことを言い出すと、母は興奮が収まらず滔々としゃべり、きりがありませんでした。まがった親指を立て、しきりに、祖父は非常に素晴らしい偉大な人だったと褒めちぎりました。月日が経つにつれて、私の心の中で、祖父のイメージは高く大きくなり、祖父の物語は私の脳裏にはっきりしてきました。

祖父が生まれた時、家は貧しく、生活は苦しく、しかたなく、家を出て上海へ行き、商店の見習いになり、その時期、いやというほどの苦しみをなめました。チャンスに恵まれ、友人の援助を経て、中年になって日本へ渡り商売を営み、絶え間ない苦闘の末、創業数十年、ついに巨大な成功を得て、日本の“阪神財閥”になりました。貴ぶべきは、祖父は豊かになっても本(もと)を忘れず、いつも、自分が中国人であることを忘れず、孫中山先生が指導された民主革命に心を尽くし力を尽くし、更に、公益に心を注ぎ、故郷の教育に積極的にかかわり、建設事業にますます関心を払ったということです。何度も寄付をし、気前よくお金を出し、ひいては全力で人助けをし、苦労している人々には同情を寄せ、私心のない援助をし、子どもは厳しく育て、溺愛せず、祖父はいつも祖母に、“子孫に金山銀山を残すよりも、子孫に、徳を積み、どのように身を持するかを教える方が優れている”と言っていました。

その時代に、祖父は、次の世代に対し、とことん刻苦奮闘することを求め、独立自主の人を育てるという理念を持っていました。これは、高く評価されるべきです。母は、“お祖父さんが私たちに残したのは心の財産です、それは、取っても使っても尽きることはない宝です。”と言っていました。それ故、私はこの宝を読者に与え、後の時代に伝え、分かち合うことを願います。

外孫 曹愛徳